

# 第十二章 爬虫類

## 第十二章 爬虫類

ノロがピョンピョン跳ねながら榊と加藤に近づく。それはノロの惑星に両生類が誕生したことを示していた。二人は地球の状況を報告しようとするがノロは掌を開いてへびの赤ちゃんを披露する。

「爬虫類も間近だ。可愛いだろ」

三角頭の派手な色をしている。二人は後ずさりする。

「毒蛇だろ！」

「大丈夫。赤ちゃんだからまだ毒を持っていない」

忙しいと言わんばかりに外へ走り出す。そして姿を消す。とりつく島もない二人は首をすくめて両腕を広げる。加藤が苦笑いしながら空を見上げる。

「まったくイリのことを心配していない。ノロには地球のバカ騒ぎなど関係ない」

榊も苦笑いする。

「仕方がない。とにかくイリに報告しよう」

二人は宇宙戦艦で地球に戻る。

\*

「薄情ね」

イリがポツンと言葉をおく。かばうわけではないが加藤が応える。

「元々こんな地球がいやだから宇宙に飛び出した。『戻れ』と言っても聞く耳はないはず」

「進化しすぎたとか、喧嘩両成敗とか言ってるけど、目の前の惨事に目をつむるなんて私にはできない」

言葉に勢いはない。そして決心したような強い口調ではなくボソツと繋ぐ。

「ノロに相談したり頼んだりするつもりはないわ」

いつものイリとは違う弱気な言葉に榊も加藤も違和感を覚える。宇宙戦艦の艦橋の巨大浮遊透過スクリーンに絶滅危惧種の動物たちの映像が流れる。

「独裁者に踊らされて多くの人が殺し殺された。でも動物はどう？ 何も言わないけれどもかなりの種が絶滅した。恐竜が滅びたのは人間の責任じゃないけれど、この数百年で人間は好き放題してお互いを殺し合い一緒に動物や植物までも殺した」

榊がよく分かったと大きく首を前に振るが、イリの弱々しい声は途切れない。

「猿はどう？ ミンクから皮を剥ぎ取ったコートを着てダンスパーティーを楽しんだかしら」

加藤は小さく相づちを打つが榊は大声を出す。

「おれたちは十分理解している」

「でも地球人は分かっていないわ」

## 第十二章 爬虫類

「分かっていないことも分かっている」

急にイリが泣き出す。

「どのようにしたら分からせることができるの？ 私たちは神様じゃないわ」

会話が止まるが三人の頭には次のような感覚が共有される。

もうどうしようもないのか。だったら地球にいる必要はない。ノロの行動は理解できる。つまりノロは地球人に愛想を尽かした。ノロなら何とかできるのではとの思いはあるが、網を持つてカブトムシを追いかけてたりヘビの卵を温めたりするノロを止めることは不可能だ。

「人類に愛想を尽かしたけれど地球を愛しているわ。だから第二の地球を造ろうとしているのよ」

もちろん榊も加藤も分かっている。

「まるで神の行動をまねしている」

「本人に自覚はないわ。それにどう見ても神様にはほど遠いわ」

二人の意見にイリはそのとおりと云わんばかりに少し勢いを付けて頷く。

「ノロの行動、分かっているようで分かっているなかつたわね。私たち」

このイリの言葉で、イリ自身はもちろん榊も加藤も悟る。

「第二の地球を造るというのは、生命の起源の謎解きだと思っていたけれど……」

加藤の言葉を無視して榊が割り込む。

「進化進化と言ってたが、アイツにとって進化なんかどうでもいいんだ……」  
今度はイリが割り込む。

「知性を持った人間がなぜ殺し合いばかりするのかを基礎から研究しようとしているんだわ」  
この結論が三人の熱を奪う。

「殺し合いはすべての生命体がしている」

「それは子孫を残すための最低限の戦いだわ。無意味に殺すことはない」

「ある種を絶滅に追い込むと自分たちも絶滅するかもしれないからな」

ここで誰もが同じ結論を共有する。まず加藤が口を開く。

「進化と戦いは同時並行的に行われる」

「進化と戦争はコラボ。正しい、間違いと一方的に決められない。悲しいわ。いえ、その反対？」

「楽しくはないはず。神はサイコロを振らない。偶数なら楽しい。奇数なら悲しい。そんなものじゃない」

加藤が神妙な表情で言葉を置いていく。

「分かる。分かる。神は喜びと試練を同時に与えるものね」

この発想に榊も加藤も驚く。

「生みの喜びと苦しみ」

二人はイリに頭を下げる。しかし、帰ってきた言葉は意外だった。

## 第十二章 爬虫類

「文句を言わずに植物や昆虫や爬虫類は神を受け入れる。人間より遙かに知性があるわ。神を無視して戦争ばかりする人間は大馬鹿者だわ！」

\*

「ひよっとしたらノロは爬虫類で進化の実験を打ち止めにするかもしれないぞ」  
突拍子もない榊の言葉にイリと加藤が首をひねる。

「恐竜だ。ザウルス系恐竜は巨大化して様々な動物を食い殺した」

「あつ、そうか」

「特に肉食恐竜は草食恐竜を手当たり次第殺した」

「だから天罰が下って隕石が落ちた……馬鹿げているわ」

イリが自嘲すると加藤がほんの少し反論を試みる。

「肉食恐竜は武器を使っていない。強力な歯や顎が武器というなら別だが」

榊が独自の見解を続ける。

「口から火炎放射器のような光線を発射していたとしたら？」

こう言いつつ笑い出す。加藤も笑いながら補強する。

「ゴジラのマネをして？」

三人がそろって大声を出して笑う。

\*

## 第十二章 爬虫類

ここはノロの惑星。あのヘビの赤ちゃんが成長して虹のような身体になる。そしてヘビ特有の舌の代わりに口から七色の光線を吐き出す。身体を包む細かいウロコからはそのウロコごとに様々な色の光沢が現れては消える。まるで虹のように見えるのはこのためだった。

「この星ではこういう進化もあるのか」

ノロが大きな口を横一文字に開く。そのヘビはノロに光線を浴びせることはない。むしろノロの丸い体に絡まってうっとりとしてノロを見つめる。

「俺って人間の女にモテるけれど、ヘビにも人気あるんだ」

ノロはそのヘビのあちらこちらを触る。

「スリーサイズはまったく同じ。これじゃグラマーかどうか分からん。ヘビの宿命か。これじや女のヘビは男のヘビに出会ってもアピールできないなあ」

そばにイリがいたら「アホ、バカ」呼ばわりされるだろうが、この惑星ではノロにとって至福の時間が流れている。いくらイリや榊や加藤が地球へと誘ってもノロはテコでも動かない、それだけの理由があるのだろう。

この可愛いヘビに手足が付いてヒゲを生やしてゴジラのように火を吹いたらどうなるか。ノロは口を大きく横に広げてニーツと笑う。